

教えて！！漢方&鍼灸「発達障害にも漢方？」

附属東洋医学研究所
助教 宮川亨平

教えて！！漢方&鍼灸



～発達障害にも漢方？～

「発達障害」は小児での有病率が5～6%程度とも言われており、日常的に遭遇しやすい疾患です。「発達障害」という用語は時代とともにその表す範囲が変化してきており、さらにこの用語が使用される分野によってもその意味が微妙に異なります。しかし「発達障害」の主症状については大きな変化はなく、中核症状として自身の周辺環境や人間関係を正しく理解できない認知機能障害があり、これが原因で過度の不安や緊張が生じた結果問題行動を引き起こすものとされています。身近なところに各種のトラブルを積み重ね「『発達障害』ではないか」と思ってしまう事例も意外と多いのではないかと思います。

しかし発症原因については脳内化学物質の分泌が関わっているとされておりますが詳細は分かっていないことも多く、それ故に根治療法として確立した治療法は未だに存在しません。そのため診断に至っても治療に難渋するケースも多く見られます。



こういった場合でも漢方薬の投与で症状の改善が見られることが多くあります。

漢方薬は古来から夜驚症や小児疳症（いわゆる疳の虫）などの小児精神科領域に対する処方があり、「発達障害」についても漢方薬の投与で認知機能障害から生じる過度の不安や緊張を和らげることにより問題行動の出現を減少できている例が多く存在しています。

「発達障害」を有する患者に対して使われる処方としては以下のものが有名です。

- 抑肝散（怒りが前面に出るタイプ）
- 大柴胡湯（心身の緊張が前面に出るタイプ）
- 甘麦大棗湯（不安感・感情の不安定さが前面に出るタイプ）

上記3種類の処方が比較的多用されますが、全身状態や他の症状・行動を参考にしてそれ以外の処方が用いられる場合も多いです。

漢方薬の服用による効果としては前述したとおり問題行動が減少する他、併用している西洋薬の減量が得られる場合、西洋薬の副作用を軽減できる場合などがあります。一部の生薬による肝機能障害や間質性肺炎など漢方薬自身に副作用が無いわけではありませんが、より適合する処方方をより適合する用量で用いることにより副作用を減らすことは可能です。

「発達障害」と診断されていて治療についてお困りのことや迷うことがある場合は一度ご相談いただければと思います。

12月号は「検査で異常がなくても体調に不調を感じたら、治療を始めてみませんか？」です。

